

ろで植物の成長を例に取り、人為による強制はただちに植物を死に至らしめるものではないし、また植物の垂直に伸びようとするほんらいの傾向を押さえてかなりな程度までわれわれのおもいのままに成長の方向をコントロールできることをみとめるいっぽうで、そうした強制がいったん取り払われるとそれ以後の植物の成長は確実にもとの垂直の方向に復帰するものであることを指摘して次のように述べている、「教育はたしかに一つの習慣にすぎない。ところで、自分の習ったことを忘れ、なくしてしまう人もあり、またそれを覚えていた人もあるではないか。この違いはどこからくるのだろうか。自然ということばを、自然に従った習慣に限定しなければならないとするなら、このようなめんどろな話をしないで済む⁴⁾と。自然に従った習慣だけが真に子どもの身についた知識となることができる、ということであろう。次にルソーの主張する子どもの各発達段階に即した教育を見ていくことにしたいとおもうが、それらはすべてルソーの生きた18世紀中葉のフランスの貴族社会で一般的におこなわれていた子育ての批判からまずはじめられているという点を指摘しておきたい。ルソーの目には同時代の教育はことごとく子どもの自然を無視し、子どもにたいしてもっぱら親たちの都合や価値観だけを一方的に押しつけるものとして映っていたからである。

一、0歳～3歳

a. 発育の生理と心理

この時期の子育ての問題点としてルソーが第一にあげているのは貴族の若い母親たちが一般に子育ての煩わしさを嫌って子どもが生まれるとすぐに乳母に預けてしまうという風習のことである。ルソーによればこの風習には二つの考えなければならない点が含まれている。第一点目は乳母は自分に預けられた子どもの養育に関してさしあたっては愛情ぬきのたんなる義務感しか抱くことがないということ由来する問題である。第二点目は乳母による養育がなんとか無事に運んだとしても子

どもがやがて乳母の手から離されてふたたび母親のもとに返されてきたときに起こる問題である。まず、第一点目に関してであるが、子どもの養育がたんなる義務感だけからおこなわれた場合、それはいきおい養育する側の乳母の負担にならないということが優先されることになるためにややもすれば子どもの発育面にたいする配慮に欠けたものになりがちだということである。ルソーはかれの時代の育児の問題点を指摘したビュッフォンの次の文章をまず引用する。「子どもが母の胎内を出るとすぐに、すなわち体を動かしたり、手足をのばしたりする自由が得られるとすぐに、人は子どもに新たな束縛をあたえる。産衣にくるみ、頭を固定し、足をのばさせ、腕を体のわきに垂れさせて、ねかせておく。あらゆる種類のきれやひもを体にまきつけ、そのために体の向きをかえることができなくなる。息もできないくらいしめつけられていなければしあわせだ。体を横むきにねかされて、口からでてくる液体がひとりでに流れでるといふふうになっていればしあわせだ。子どもはよだれが流れでるようにするために頭をふりむける自由さえあたえられないだろうから⁵⁾。またルソーはこれにコメントするかたちで次のようにもつけくわえている。すなわち「生まれたばかりの子どもは、手足をのばしたり、動かしたりする必要がある。長いあいだ、糸玉のようにちぢこまっていた麻痺状態から手足を解放する必要がある。なるほど、子どもは手足をのばさせてもらえるが、それを動かすことをさまたげられる。頭も頭巾でしめつけられる。まるで、子どもが生きているように見えるのを、人は心配しているようだ」とか、またさらに「子どもの手足を動けないようにしばりつけておくことは、血液や体液の循環を悪くし、子どもが強くなり大きくなるのをさまたげ、体質をそこなうだけのことだ⁶⁾」などと。そして結論として自分たちの社会に発育不全の子どもや発達に障害をかかえた子どもが数多く生まれているのは要するに大人の都合だけの観点から子どもの養育がおこなわれていることの結果に他ならないと断定している⁷⁾。乳児期における子ど

4) Ibid., pp. 208

5) Ibid., pp. 253-254

6) 以上二つ引用文はいづれも Ibid., p. 254

7) Cf. ibid., p. 254